

らねばならぬ。然るにこの事が既に信ず可らざることであり、貴霜即ちクシヤンを月氏と稱することは、單に漢史の上に於る便宜上の稱呼に過ぎないとするならば、大夏語即ちトクハラ語は一方に月氏語と呼ばれたと見る可き理由は存しない。即ちトクハラ語の別名であると考へられる *arsi* 語といふ名を、史乘に見える事實の上から月氏語に相當するものとして理由づけることは出来ない譯である。

併しながら上に述べた次第を逆に見て、トクハラ語の別名である *arsi* といふ名は、月氏といふ名に相當するものと考へられるから、これ等の兩者を同一名稱と解し、これに依つて却つて漢史、殊に前漢書の記事の不備を補ひ、後漢書の記事の寧ろ確實であることを證すべきであるといふ説が主張されるかも知れない。かゝる説に對しては余は進んで月氏の月 **nguer*, **nguet* 或は *nar*, **nat* の如きが *arsi* の *ar* を寫したものと見ることを必ずしも適當の見解とは認め難いと主張しなければならぬ。何故かといへば、第一には月の字面を以て *ar* の音を寫した用例を見出し得ず、却りて *ar* とか *ur* とかを寫すに用ゐられた證據¹³の存すること、第二には *ar* を寫す爲ならば漢人が何を苦しんで態々語頭に *ar* 音を有する「月」を選んだであらうか、それよりも適當な「安」字の如きがこの時代に *arsak* (安息) の *ar* を寫すに用ゐられて居るに鑑みても、これを疑はしめるに足ると思はれるからである。要するに音韻現象の上からは月氏と *arsi* 及び *asi* との相應が一應認め得られるにしても、實際に於ける用例の上から考へて見て、これを適切なる解釋と承認することは出来ない。

尙又注意しなければならぬことは、もし「月氏」は *arsi* であるとするならば、トクハラ語は一に *arsi* 語と稱したといふのだから、月氏語とトクハラ語とは同體異名である。ところでこれらの人々の考に依ると月氏語と貴霜即